



傾く滝

杉本苑子

かたむ たき
傾く滝

すぎもとそのこ
杉本苑子

© Sonoko Sugimoto 1985

1985年11月15日第1刷発行

1992年3月26日第10刷発行

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01

電話 出版部 (03) 5395-3509

販売部 (03) 5395-3626

製作部 (03) 5395-3615

Printed in Japan



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義

製版——豊国印刷株式会社

印刷——株式会社東京印書館

製本——株式会社若林製本工場

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内
容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いい
たします。 (庫)

ISBN4-06-183618-8



講談社文庫

傾く滝

子

講談社

目次

傾く滝

解説

神谷次郎
五八

五

傾く
滝

一の一

鍋やきうどんの土鍋は、駒三の顔の倍もあった。ふちには汁が焦げてこびりつき、熱々の蓋はやけに重い。落とすまいとして、細っこい腕に力をこめてあけるととたんに、うまそうな汁の香が渦まわく湯気にまじって威勢よく立ちのぼり、少年の胃ぶくろはグググと鳴る。駒三自身にかわって、胃ぶくろがまず、歓喜の叫びをあげるのだ。

塗り箸を口に咥え、彼はちよつとのま、うれしさを噛みしめるように目をとじる……。それから食べだす。無我夢中ですすりこむ。鼻めどがいららぎ息が荒らくなる。

（せくなよ、おい。せつかくの味がわからないじゃないか）

毎度、自分に言いきかせるのだがむだだった。みるみる半分ほど鍋の中身を減らしてはじめて、少年は人心地をとりもどし、おもむろにあたりを見廻すのである。

親方の足を一刻ほど揉むと、駄賃に一文くれる。それを巾着の底にためておいて、三十二文になるといふや翁庵へとんでくるのだ。

永代の南の橋詰めにあるこの古ぼけたそば屋は、老人夫婦が経営してい、味かげんの下手さで評判だった。口のおごった芝居者になど、したがってこの店なら、めったに出くわす気づかいはい

ない。駒三にはそれがありがたかった。

年中すきっぱなしの彼の腹は「まずい」とはどういうことか、さっぱり理解できなかったし、たとえ自腹で食べる夜食であっても、十二にしかならない追い使い同然の小僧では、翁庵特製の鍋やきを抱えこんでいる図など、仲間に見られたくはないのである。ぜいたく沙汰だと非難されるにきまっている。

たしかに、もりかけなら十六文で埒のあくところを、回数へらしめてもいざ食べるとなったら、しんそこ、満足できるものを食べようとする貧乏育ちには似合わない性格が駒三にはあり、この気の強さのために、

「憎ていなガキだ」

と、親方の家でも楽屋でも、とかく可愛がられない損な日常だったのだ。

もつとも親方の足揉みといったところで、每晚仰せつけられるわけではない。市村座の火縄売りをしている母親が、あまりにも餓え疲れた様子をしている時も、つい見かねて、

「餅でも買いなよ、母ちゃん」

せっかくためた十文、二十文を渡してしまふ場合があるから、鍋やきを氣ばったにしろ駒三にとって、それはたかだかひと月、時によってはふた月に一度の、ささやかな奢りにすぎないのである。

翁庵の嘉助じいさんは、そんな事情をよく知っていた。知っていて知らん顔をしているかわりには、駒三の鍋の中身を多くする。うどん玉は二つ入れるし、かまぼこも思いきり厚く切った。

小指ほどな芝^{しば}えびの天ぷらではあっても、一つのところを二つ張り込んでやっている。他の店との比較を知らない駒三は、上鍋やきとはこういうものだと思っている。ひとことの礼も、したがって言ったためしはない。じいさんのほうもそれが看板の、無愛想なしかめつらを湯気の向うに霞^{かす}ませているだけである。もっともじいさんにすれば、子供とはいえ駒三は、自分の店の品物に全身全霊をあげての感動を示してくれるたった一人の、貴重な客であつたかもしれない。

昼間のうち吹きまくっていた木^こ枯^{から}がやんで、骨の髄^{ずい}まできしみそうな凍^こてついた夜になった。

翁庵にはめずらしくこの日、駒三のほか二組の客がい、めいめい蒸籠^{せいろう}を二、三枚ずつ前にひかえて陽気に飲んでゐた。駒三の存在になど注意を払う者はいないし、いまや食べるのに一心不乱な駒三のほうも、唄^{うた}おうとわめこうと、いっさい彼らに無関心だった。

天保二年が、あと十日ほどで暮れようとしている節季^{せいき}師走^{しわす}の、時刻は亥^いの刻——。大川端に面した片側町はほとんど表戸をとぎし、灯^ひがもれているのは翁庵だけである。

……と、このとき、油障子がふいに開^あいて、男物の帯、着物、大小をかかえた小さな女の子が一人、押し入れられるように土間へはいって来た。

「いいね、このお店から出てはいけないよ」

うしろで男の声がし、すぐ障子がしまつて、そのままそくき走り去る足音が聞こえた。

すすばけた八間^{はちけん}行灯^{ぎやうとう}の明りに湯気がからまつて土間はうすぐらく、酔^よっぱらいの濁^だみ^みた唄^{うた}声^{こゑ}で喧騒^{けんそう}をきわめている。外の声は調理場まで聞こえず、嘉助夫婦は女の子の出現にすら気づいてい

なかった。出入り口に近く腰かけていた駒三だけが、ひよいと目をあげて女の子を見、ばかにでもなったように箸をうごかすのをやめてしまった。

四ツか、せいぜい五ツだろうか。おたばこ盆に結った髪には、ひと粒鹿の子の紅い布がかかり、山繭ではあるが冴えた紫の、小ざっぱりした袷に、麻の葉もようの帯をその子はしめている。縦よりも横に長いと言いたいほど寸のつまった輪郭の中で、きつと引きしめたおちよぽ口がなんとも愛らしかった。

駒三の口もとに微笑がこみあげてきた。

「こつちへ来たらどうだい？ どうせ床几がぁいっているんじゃねえか」
声をかけたが、聞こえなかったのか、女の子は知らん顔をしている。

「腰かけろってばさ。強情っぱり！」

袂をつかんでひっぱると、女の子は危つかしくよろけた。手さぐりで飯台のきわを廻り、ま向いの床几に腰をおろす動作の、あやつり人形に似たぎごちなさと、痛々しく宙にすわった視線とで、駒三ははっとさとした。

「おめえ、目が見えねえのか？」

女の子はうなずいた。全身が、いきなり少年は熱くなった。

「ごめんよ。知らなかったんだ。邪慳にしてわるかったな」

そして、上目づかいに相手の表情をうかがいながら、

「家、遠いの？」

と訊いた。

「じきよ。あたいのおうち、今川町なもの」

「ふうん。……今、外にいたのは父ちゃんかい？」

「お兄ちゃん」

さんざんためらったあげく、絶壁をとびおりるほどの決意で土鍋の蓋に駒三はかまぼこをのせ、女の子の前へ押しやった。

「食えよ」

相手は前を向いたきりである。見えないのだ、と気づき、

「かまぼこだよ。うめえぜ」

蓋のはじをつまんで、飯台にこつんと打ちつけた。

「いらない」

そっけなく女の子は拒絶した。

「どうしてさ。おれ、いつもこいつはお楽しみにとって、一番あとに食うんだけど、今夜はがまんしておめえにやるよ」

「いらない。たべたくない」

「けッ」

駒三はのどを鳴らした。

「お高くとまってらあ。なら、むりにとは言わねえや。おれが食っちゃまうだけさ」

むしゃむしゃやりかけたとき、嘉助の妻のお関はあさんがやっとなの子を見つけて、

「どこの子だい？ 駒坊のつれかい？」

泳ぐように寄って来た。

「知らねえよ。どこかの人が今、土間へ押し込んで行っただよ」

「冗談じゃない。それじゃ捨て子じゃないか」

かかえている衣類と女の子の顔を見くらべて、お関はあさんは金切り声をあげた。

「身投げですよおじいさん。身投げの親が子供を店へ置きざりにしてゆきましたよッ」

「なんだ、身投げだあ？」

酔客たちは総立ちとなり、菜箸片手に、じいさんも板場からのめり出てきた。

「押しつまってくるとういう捨て子が、大川端にはたまにあるんですよ。縁起でもない」

大仰なばあさんの嗟嘆を抑えつけるいきおいで、このとき、女の子の声がひびいた。

「ちがうよ、兄ちゃんは身投げじゃない。川へ落ちた子供を、助けに行つたのよ」

店の中はしんとなったが、つぎの瞬間、

「行ってみろッ」

床几を蹴倒して客も嘉助夫婦も、われがちに往来へとび出していった。

「やじ馬だなあ、どいつもこいつも……」

鍋の汁にそば湯をそそぎこみ、大切に大切にすすりながら、

「子供が落ちたって言うけどさ、こんな夜ふけに、外をほつつき歩いている子供なんているか

な。おめえの兄さん、河童かカワウソに化かされたんじゃないかねえのか」

駒三は嘲弄した。女の子の下ぶくれの頬が、ますますふくらんだ。

「夜ふけだからって、どの子もおうちにいるとはかぎらないわ。あんたもあたいも子供だけ、こうしておそば屋さんに来てるじゃないの」

一本やられたわけである。駒三はてれ、そばつゆの最後のひと口を、わざと音たててすすりこんだ。ところへ連中がどやどやもどって来た。

「奥がいい。私らが寝場所に使っている小部屋を、いま片づけますからね」

喋りたてるばあさんのあとに、下帯ひとつの若い浪人者が、子供を横だきにしてつづいていく。男の子だ。意識を失っているらしい。

（あれ、あの子、うちの若親方じゃねえか？）

その横顔を一瞥したせつな、駒三の顔色はかすかに変った。

（まちがいない。若親方だ！……でも、なぜ今じぶん若親方が川へなんぞ……。なぜだ？）

慄えが這い上ってきた。歯を鳴らし、飯台の角をかたくつかんで駒三は立ちあがった。

（とにかく逃げ出さなければ……。こんなところにぐずぐずしてて、かわり合いになったらたいへんだぞ）

そのくせ足は、吸いよせられるように人だかりの方へ動いた。大人たちの股ぐらをかき分けくぐりぬけ、駒三はおそるおそる奥の小部屋をのぞき込んだ。

一の二

少年はしたたか水を吐かされ、びしょぬれの衣類をぬがされて、赤ちゃけた畳の上にうつむかされていた。

浪人者がその上に覆いかぶさり、背をさすりあげ、さすりおろしているの、うしろからでは少年の、むき出しの足しか見えない。青い炎をからませた備長の堅炭を、二つの七輪にあふれるほど盛りあげて、通路へかつぎ出してきた嘉助じいさんへ、

「子供をあたためるから、たらいに湯をとってくれ。ほんのぬるま湯だ。いきなり熱いのにつけると危ない」

てきばき浪人は指図する……。

「あ、息をふきかえした。うまいもんだな」

「医者をやぶまでもないね」

処置の的確さに、やじ馬は声をあげ通しているが、浪人は無表情だった。意志的な、なかなか凜とした風貌の持ちぬしだが、眉間に深いたてじわを一本刻んでおり、それが顔だちから受ける印象を、ひどく陰鬱なものにしていた。

ぬるま湯にひたされ、全身をやわらかく揉みほぐされているうちに、少年ははっきり意識をとおりもどし、目をあけてあたりを見た。

同時に、すばやく状況を理解したのだろう、無遠慮にそそがれている幾つもの目から、自分の

全裸をかくそうとし、両足をちぢめて起きあがりかけた。

「まだむりだ。もう少しじっとしておいで」

着ていた半纏はんてんをぬいでお関せきばあさんが掛けてやるのを、さもきたならしそうに胸もとまで押しさげ、敵意のこもった目で少年はヤジ馬を見回した。

さくら色の、ほくろ一つ搔かききず一つない裸身の美しさにまして、少年の容貌はきわ立っていた。怒りを燃えたぎらせているその顔は、ひと塊りの白い焰ほのおさながら、静かな威と、氣品にみちて、対する者を圧倒した。

「おい源さん、この子、どこかで見たことがありますやあしねえか？」

ヤジ馬の一人がつれに向かって言い出した。

「それなんだ。おれもさつきから首をひねっているんだが……」

「坊や。おめえ、どこの子で名は何というんだい？」

返事などしそうもない。

「そうだッ」

一人の口からとんきような声がはじけた。

「思い出したよ。こいつは海老蔵えびざうだ。成田屋のあととり息子だぜ」

「ちげえねえ。そっくりだ」

「まてよ、おい……。よく似てはいるけど訝おかしいじゃねえか。お乳母んぼひ日傘ひがさで、ちよいと出るにも男衆おんなの四、五人はひきつれて歩く大名題おんなだいの息子がよ。この夜ふけ、一人ぼっちで川へはまりこむ